

ふるさとわがまちづくり

下越戸自治区

◆矢作川の流れ

古代、矢作川の流れは山深い渓谷を蛇行しながら平野部の越戸村にて分岐し、二つの流れとなっていました。

東矢作川(高橋川)は、寺部守綱寺の東から南流して長興寺に、一方の西矢作川(衣川)は、越戸、荒井の郷中を貫流して梅坪靈岩寺門前から児ノ口、下町を経て長興寺にて東矢作川と合流していました。

約400年前、河床替改修工事が行われ川筋が付け替えられて今日の矢作川の原形ができました。

越戸は標高40m強と、比較的低い土地です。かつては川瀬であったことから、地質は川砂と玉石で構成されており、水捌けは良好なもの強固な地盤とはいえません。

往古より、母なる河矢作川が近くを流れ水利用は快適でしたが、洪水など水との戦いは生活の常でした。

◆「下越戸」の由来

越戸とは、現在の青木、平戸橋、越戸を総称していましたが、古くは灰宝、越出、越渡などと言われていたと日本地名辞典に書かれています。また、川の水がよく乗り越える所「越所」・青木原台地の腰の位置にあることから「腰所」、矢作川の水運を利用して人が多く越して来たことから「越人」とも表記されています。

◆先人達のまちづくり

町を縦断する矢作川、飯田街道(R153)、三河鉄道(名鉄三河線)は、まさに下越戸の大動脈。文化・経済・教育など全ての面で大きな役割を果たしています。

大正11年1月17日、三河鉄道は幾多の難工事を経て、ついに籠川を渡り、越戸駅が開業しました。人は歩き、荷物は荷車や牛馬車で運んでいた時代に作られた道幅8mの駅前通りは、鉄道



の開通を切望していた先人達の喜びの表れだったと思われます。

- ・矢作川を借景としたまち
- ・豊かな歴史遺産が実感できるまち
- ・災害に強い生活環境のまち

近年、下越戸ではこんな願いを持って、区民一体でまちづくりを推進しています。

80数年前、名古屋広小路通りの再現を夢見て、8mの駅前通りを築いた先人達。時は移ってもそのまちづくりの精神は今、私達が受け継ぎ、確実に次の世代へ引き渡していくなくてはなりません。

◆一寸いい話 ごみステーションの集約化

大正11年、三河鉄道が敷設された当時の戸数は約40戸。昭和40年代後半から急速に住宅化が進み、昭和50年には約200戸となりました。

人口が増えれば当然排出されるごみも急増する。30余年前、時の区長、故羽田洋は早くごみ問題と対峙し、地道な立消指導を開始しました。以来「下越戸の区長はごみ区長だ」と言われる程、区民総力での活動が今日も続けられています。

当自治区では、420余世帯のごみを1ヶ所のごみステーションに集め日常管理、監視活動を徹底し、収集作業の効率化を図っています。ごみ対策には特効薬はないが、一人ひとりの心掛けと長い年月をかけた地道な努力こそが最高の良薬です。昨年の市関係機関の表彰も長年の実績の賜物です。



◆一寸いい話 ひまわり隊誕生

平成6年は深刻な水不足や、西尾市における中学生の“いじめ”による自殺を発端に痛ましい事件の続発など、事件・事故・自然災害が社会的問題となっていました。



当自治区では「心のふれあいを大切に住み良い我が家街をつくろう」をスローガンに、安全パトロール隊(愛称:ひまわり隊)を結成しました。市内はもとより愛知県下でも初めて組織された地域安全パトロール隊として、関係各方面から注目を浴び趣意書・組織図等が他地域の参考にと活用されました。



◆到達点のない地域づくり

中心市街地までわずか数キロの位置にありながら、閑静な住宅地である下越戸も、近年は公共事業の導入や民間における住宅地開発などで大きく変革を遂げています。

- ・新しい幹線道路と結ぶ既存生活道路網の整備
 - ・残り少なくなった緑の保護・保全
 - ・世帯数増加に対応できる公民館の建設
 - ・矢作川と鉄道に挟まれた当地区の将来像
- など重要課題も多くあります、今この地で育っている子供達が20年、30年後に「下越戸に住んでいて良かった」と実感できる地域にしなければなりません。

時代や人が変わっても、地域づくりは永遠に続く、到達点のないものであります。

下越戸自治区データ

(H20.4現在)

世帯数：416世帯
：202世帯（昭和51年）
組数：30組
面積：0.62Km²
自治区たより：「下越戸NEWS あんねん報」
年4回発行

回覧：月2回
ちびっ子広場：2箇所
都市公園：下越戸公園
防犯灯設置箇所：96箇所
小学校：青木小学校区
自治区会館：下越戸児童館（TEL45-5781）



下越戸地内を縦断している 矢作川、国道153号線、名鉄三河線が大動脈のように縦断している下越戸のSをデザインしています。